



# ポーランド・国際タペストリー・トリエンナーレを観て

染織と生活社 佐藤能史 編集長

わが国では、いま一つ注目度が低いと思われるテキスタイルアート。そのテキスタイルアートの国際展が東欧・ポーランドで四〇年近い歴史を重ねていまも開かれていることを知る人は少ないかもしれない。ビエンナーレ形式（隔年開催）で開催され、今回が一三回目となる、「国際タペストリー・トリエンナーレ」をポーランド第二の都市ウッチに出かけて取材された、染織と生活社・佐藤能史編集長のレポートで、追体験してみよう。



会場の中央染織博物館

六月の初旬にポーランドを訪れた。主目的は、首都ワルシャワの南西一三〇kmに位置するポーランド第二の都市ウッチで五月一〇日から一〇月三十一日まで開催されている「第一三回国際タペストリー・トリエンナーレ」を見ることであつた。

一九七二年に始まったこの展覧会は、現在なお開催され続けているテキスタイル・アートの国際的展覧会としては、世界で最古のものである。

ワルシャワ中央駅から、コソバートメントの列車で約一時間三〇分、ウッチ・ファブリナ駅に到着する。その間、車窓の外は、ほとんど町らしい町はなく、森林や田園風景が流れていく。ウッチは、一九世紀の初めにウッチ工業地帯の中心都市として開発された町で、繊維産業が盛んな

一九六〇年代の終わりごろから、いわゆるファイバー・アート（アート・ファブリック、テキスタイル・アートなど名称は様々）と呼ばれる前衛的な繊維造形が世界的に注目を集めるようになる。その牽引役となつたのが、スイスのローザンヌで一九六一年から開催されていた「タペストリー・ビエンナーレ」であつた。そのビエンナーレに出品されていた作品の中に、著名なマグダレーナ・アバカノヴィッチをはじめ一群のポーランドの前衛的なタペストリー作家がいた。彼らはポーランド派と呼ばれ、その特異な作品表現は高く評価された。そうしたことが、ポーラ



扇千花 [Vague sense of distance]

室の暗いイメージからは一新していた。

五一カ国から二二八点の作品が出品され、日本からは、扇千花、村山順子、奈良平宣子、野田涼美、吉水絹代の五名が参加した。この五名は、ポーランド二〇点に次いで、アメリカと共に二番目に多い出品数である。

金賞一点、銀賞二点、銅賞三点など、出品作品からは、事前の審査で合計一六の受賞作が選ばれたが、今回、金賞に選ばれたのはノルウェーの作家、アンヌグリー・ローランドの水溶性ビニロンを使ったミシンワークで制作された透過性をうまく生かして清らかな印象を与える平面作品「Monuments」であつた。残念ながら、日本の作家は一人も入賞しなかったが、それぞれ繊細な感性と色彩感覚で制作したタペストリーや繊維造形作品を出品していた。

ポーランドのタペストリー・トリエンナーレの特徴は、公募によるコンペではなく、各国にいるコンサルタン



(上) は金賞作品 Anne-Gri Loland [Monuments] (下) は吉永絹代 [Waterscape] (左)

トが出品作家を推薦するといふシステムを取っていることである。現在、日本のコンサルタントは、京都の「ギャラリィギャラリー」オーナーで、京都国際現代テキスタイルアートセンターを主宰する川嶋啓子氏が第九回展（一九九八年）から務めている。別に、受賞者を選ぶ国際審査員が六名いて、今回は日本から、ステンレスステール線を素材にした造形作品で国際的に活躍している繊維造形作家で長岡造形大学教授の熊井恭子氏が選任された。

このトリエンナーレは、一九七二年に「全ポーランド産業及び芸術的フェアリック・トリエンナーレ」という名称の国内展としてポーランドの作家七七名が参加して出た。一九七五年開催の第二回目は、外国から招待作家の作品が出品された。出品したのはポーランドを含めて一四カ国で一〇七名（うち外国作家は二八名）であつた。日本からは、小名木陽一、小林正和、中川千早、藤岡恵子、佐久間美智子の五名が参加した。この時、小林正和の作品に、最高賞の文化芸術大臣賞が贈られた。

一九六〇年代の終わりごろから、いわゆるファイバー・アート（アート・ファブリック、テキスタイル・アートなど名称は様々）と呼ばれる前衛的な繊維造形が世界的に注目を集めるようになる。その牽引役となつたのが、スイスのローザンヌで一九六一年から開催されていた「タペストリー・ビエンナーレ」であつた。そのビエンナーレに出品されていた作品の中に、著名なマグダレーナ・アバカノヴィッチをはじめ一群のポーランドの前衛的なタペストリー作家がいた。彼らはポーランド派と呼ばれ、その特異な作品表現は高く評価された。そうしたことが、ポーラ

ンドでタペストリー・トリエンナーレが始まったバックグラウンドにあるといえよう。ローザンヌ・ビエンナーレは一九九五年に第一六回を最後として幕を下ろした。

日本でも、一九八七年から、西陣織工業組合などが中心に旗を振って「ITF国際テキスタイル・コンペティション―京都」がビエンナーレ形式（隔年開催）で開始された。一時はローザンヌ・ビエンナーレやタペストリー・トリエンナーレと並び称されるほど、世界から注目される展覧会となった。しかし一九九九年にわずか六回で、おそらく経済的な理由によって、最終の宣言もなくフェード・アウトしてしまつたのは残念なことである。

一九七二年から四〇年近く、決して経済的に豊かとはいえない東欧の一国にある地方都市の博物館が、東欧革命などの激動の時代を乗り越えて極めて高い水準のテキスタイル・アートの国際展を持続しているというのは賞賛に値するといえよう。